

遺跡

吉田

吉田泉殿建物跡(鎌倉時代・西部構内2008年)

遺産

古図

山城国吉田村古図(江戸時代・京都大学総合博物館蔵)

剣鉾

探訪

東一条通での剣鉾差し(2024年)

京大構内に残される遺跡の調査成果と、関連する研究を軸に紹介するシリーズ「文化財発掘」の今回は、大学が所在する地域の歴史とのかかわりに焦点を当てます。

明治22年(1889)、本部構内にあたる場所に旧制第三高等学校が設置され、それまで愛宕郡吉田村と呼ばれていた近郊の農村から、都市の一隅へと境界の景観は大きく変貌していきます。歴史都市郊外としての盛衰を物語る構内からの出土資料に加えて、遺跡としても確認される古道や地割などをつぶさに記した古絵図、そして、そこに記載が見出され今もこの地に伝承される剣鉾祭礼の姿などを、すべて地域における遺産としてとらえ展観します。

これらを通じて、遺跡の上にある大学の存在に理解を深めていただくとともに、キャンパスの空間と地続きでひろがる「大学のある街」の歴史について、今を生きる私たちとも接点をもつ豊かで身近なもの実感する機会となることを、願っております。

1. 古代の遺産

—平安京東郊の別邸・寺院の地として—

比叡山の西南麓に位置する鴨東の一带は、古代には「山背国愛宕郡錦織郷」^{やましるのくに おたぎぐんに しごりごう}に属していたとみられる。平安京の成立後、吉田山一带の神楽岡は天皇や皇族たちの葬地とされており、また周辺には貴族層の別邸や寺院が点在して、郊外的な景観を呈していたことが、文献史料の記述からは想定される。吉田キャンパスの調査では、北部構内や吉田南構内で平安時代の遺構・遺物の出土が濃密になっており、このような平安京東郊としての開発の実相をうかがうことができる。

北部構内 地域としては北白川の南部となる北部構内では、瓦類の出土や（1）、緑釉陶器など上質なうつわ類がまとまっている地点があり、高位の貴族層にかかわる施設が存在したことを示唆している。また、平安時代の遺物は構内全体で広範に認められることから、現状では確認できていない京から東方へと至る古代段階の白川道が、この付近を通っていた可能性も考えられる。

吉田南構内 一方、吉田南構内では、青銅製の梵鐘を鑄造するための方形の土坑群6基と、鑄型や羽口など鑄造に関連する遺物が多数みつまっている（2）。周囲には土取り穴のほか、井戸や掘立柱建物跡もあり（3）、多数の土器類や土馬なども出土している。通常このような鑄造施設は、寺院の近傍で小規模に営まれるものであり、異例の規模として注目されるところであるが、その理由や性格はまだわかっていない。いずれにしろ、京内では営むことの難しい大がかりな鑄物づくりと、それにかかわる人や物資が行き交う空間として、一定の活況を呈していたことは間違いない。

尾張産緑釉陰刻花文陶器 緑釉陶器とは、珪酸鉛に発色剤として銅を加えた釉をかけて焼成し、光沢のある美しい緑色の表面に仕上げた焼き物である。平安時代に京都で出土する製品には、洛北や洛西、丹波や近江など平安京の近郊と、尾張地方で生産されたものがある。北部構内出土の資料は、見込みに線刻で花卉の文様を精巧に描いた陰刻花文と呼ばれる装飾を施すことと、貼り付けの技法による高台、重ね焼きを示すトチンの痕跡、オリーブ色を帯びた発色など、尾張猿投窯産にみられる特徴を備えており、一定以上の階層が所持し得た優品と言える（4）。



1 平安時代軒平瓦の出土状況
(東から・北部構内・1973年)



2 梵鐘鑄造土坑（北から・吉田南構内・1982年）
内型と外型を据え付けるための円形の定盤が良好に残っていた



3 平安時代の井戸（北から・吉田南構内・1994年）
平面7m四方深さ4m以上ですり鉢状に落ち込む大形井戸



4 緑釉陰刻花文陶器皿（口径16cm・北部構内出土）



5 中世の柱穴や井戸（南から・医学部構内・2010年）
北側を現在も白川道（志賀越え道）がはしる

2. 中世の遺産（1）

ー白川道と中世都市京都の波及ー

本部構内にあたる位置には、かつて、京の荒河口と近江とを結ぶ交通路「白川道」が、はしっていた。現在も「志賀越え道」や「山中越え」などと呼ばれる道路として、構内以外の場所では現役である。構内の地下にのこる路面の遺構は、12世紀までさかのぼって確認されている。

鎌倉～室町時代に相当する13～14世紀になると、道の周辺でみつかると建物や井戸など遺構の密度が高まり、遺物出土量も急増して都市的な様相が濃厚となる（5）。この段階の路面は、のちの江戸時代と異なり轍はそれほど明瞭でなく、白砂を主体に堅く叩き占めたような舗装として検出されている（6）。中世の運送集団として良く知られる近江坂本の馬借たちや（7）、のちの戦乱期に京へと攻め上る将兵たちも、この上を盛んに往来したのであろう。いずれにしろ、人々の往還や物流を担う道の存在は、平安京から中世都市京都へと変容した空間の一翼へとこの地域が連なっていくうえで、重要な役割を果たしたはずである。

貿易陶磁の出土 中世における流通様相をよく伝える遺物に、大陸産の貿易陶磁がある（8）。博多や尼崎といった交易の要となる港湾や都市遺跡を中心に多くの出土が知られるが、構内からも



8 中世の貿易陶磁（奥の皿口径13cm・本部構内出土）
奥2点が青磁、手前が青白磁



6 中世白川道の検出（西から・本部構内・2002年）
中央をはしる白い部分が砂で舗装された路面である



7 近江坂本の馬借（『石山寺縁起絵巻』鎌倉時代より）
画像出典：東京国立博物館研究情報アーカイブス
(<https://webarchives.tnm.jp/C0019204>)

多数が出土する。こうした遠来の品を入手できるような人々の存在と、それを満たす流通がこの地へも及んでいたことを、示していよう。

黄釉陶器盤 このような洗面器形の器を盤と呼んでいる。中国福建省泉州の窯跡が生産地とされるもので、玉縁状の口縁形状や文様の構成から13世紀前半代の製品に比定される。全形のわかる出土品は多くなく、とりわけ内面に「福海寿山」の吉祥句を描くものは類例をみない（9）。



9 黄釉陶器の盤（口径34cm・本部構内出土）

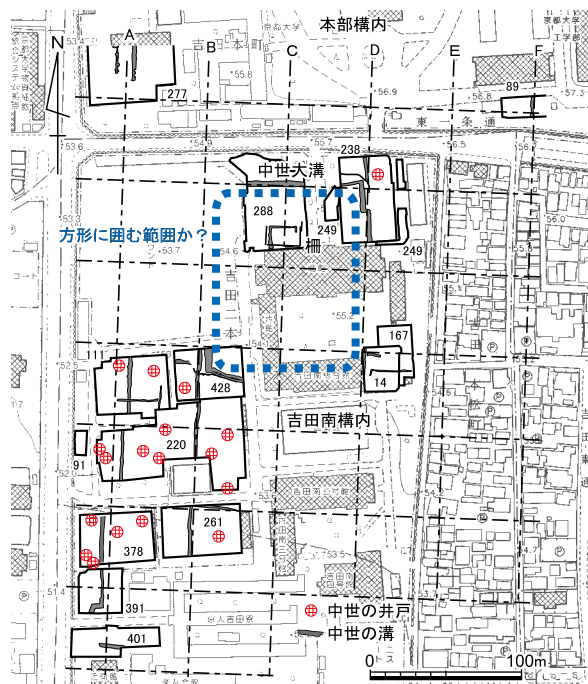
3. 中世の遺産（2） —吉田で活動した人々の痕跡—

中世にこの地を活動の舞台としていたのは、吉田泉殿町として今も地名に伝わる池泉を備えた別邸を営んだ西園寺家や、この地の財産継承にかかわる文書を残している勸修寺家といった藤原氏系譜の一族のほか、ト部氏系の吉田氏など吉田社にかかわる人々が想定される。

西部構内からは、吉田泉殿にかかわる建物や苑地状の遺構がみつき、伝承を裏付けている（表紙参照）。一方、吉田南構内では、東北の一带に大溝や柵で方形に囲まれる空間があり（10・11）、瓦溜などがみつまっている。これに対して西南の一带では、多数の井戸や建物跡などが濃密に分布しており、集住の様相を呈している。南北にはしる溝の間隔からは、方形区画の中軸（Cの南北線）にもとづく54m四方程度の地割の存在可能性も推測される。ただ、こうした中世の遺構や遺物は、いずれも16世紀にはほぼ認められなくなる。15世紀後葉に山麓から山上へ移ったとされる吉田社の変遷と、発掘成果からうかがえる一帯の盛衰が符合している状況は、旧社地を比定するうえで示唆的であろう。

大ヤツカサ土器 こうした吉田南構内の西南域や医学部構内の東辺では、14～15世紀を中心に、極端な上げ底で径が20cmを越えるような大皿が集中的に出土することがある（12）。他の遺跡で出土は知られないが、賀茂別雷神社（上賀茂神社）の神饌では、酷似する内側が高い皿形土器を「ヤツカサ」と呼称し、六寸の大ヤツカサに鯛一尾を盛る、といった内容が現在に伝えられている。これらも神事に用いられたものかもしれない。

荒廃と耕地化 南北朝の内乱、そして応仁・文明の乱やその後続く争乱で、中世の終わりころには吉田界限にそれまであった邸宅や仏堂は荒廃し、耕地化していったとみられる。構内の発掘からは、こうした状況を具体的に示す畝溝や根菜株痕の並びが、良好に検出されている（13）。一帯は、神楽岡山上の吉田社を司るト部氏系吉田氏が一元的に支配する領域となり、人々はその西南麓、現在の吉田南構内の東側一带に集住することになったのだろう。16世紀には、塀や門で防御を固めた「吉田構」として戦乱に備えたことが文書や絵図に知られ（14）、周囲に耕地のひろがる近世の社家町・吉田村へとつながっていく。



10 吉田南構内の主要な中世溝と井戸 縮尺1/5000
数字は調査地点番号。一点破線の間隔は54m



11 中世大溝の調査（東から・吉田南構内・2002年）
幅・深さ2m以上の溝が複数回掘り直されていた



12 大ヤツカサ土器の集中出土
（北から・吉田南構内・1994年）



13 畝溝や根菜株痕（南から・吉田南構内・1996年）



14 16世紀の絵図に描かれた吉田構
(紙本着色洛中洛外図屏風・国立歴史民俗博物館蔵甲本より)

4. 近世の遺産 (1)

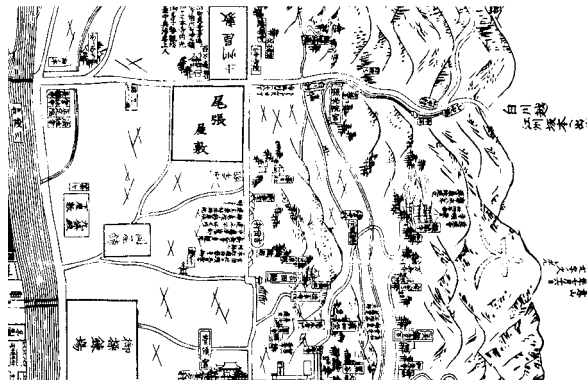
―近代都市への転機・幕末の動乱と藩邸―

幕末の1860年代、200年以上は続いていたであろうのどかな農村の景観は一変する。政治の重要な舞台となる京に多数の藩士が上洛した諸藩は、市中に至便な鴨東の農地に、新たな藩邸用地をこぞって求めたからである。

現在の本部構内西半にあたる位置には、御三家筆頭の尾張藩が、長らく主要街道であった白川道を遮断するように10万㎡以上を購入し、吉田屋敷を設置した。またその北東、北部構内西南の一角には土佐藩の白川屋敷が設けられた(15)。発掘調査では、これらの藩邸にともなう堀や水路の遺構、使われていた瓦や陶磁器類が多数見ついている(16)。明治以降にこうした敷地があらたな学校建設地に充当され、やがて「大学の街」として近代京都の一角となることを考えると、幕末の藩邸設置はその転機であったともいえる。

藩邸関連の出土遺物 北部構内の土佐藩邸と本部構内の尾張藩邸ともに、出土した瓦の多くに刻印がある。土佐藩の場合、おもに土佐の地名と関係する2～4文字で、製作地を示すとみられ、20種以上に及んでいる。尾張藩の場合、○囲みの「作」字印で、尾張常滑の御用瓦屋の生産であることがわかっており、江戸市谷の尾張藩邸跡などでも出土が知られているものである。幕藩体制が終焉を迎えようとするなかでも、藩の枠組みを重んじた供給が続いていたことがわかる(17)。

また、本部構内では、見込みや外面に「小」の字を鉄釉で描いた小椀で、尾張藩の特注品として知られている御小納戸茶椀のほか(18)、一人用の鍋や小さな火鉢、焔炉など多数の陶磁器類や土



15 「改正京町御絵図細見大成」慶応4年(1868)より



16 尾張藩邸内の水路(北から・本部構内・2000年)
石積み水路の南には藩邸設置により廃絶した近世白川道がある



17 藩邸関連瓦の刻印(実寸大)
尾張藩邸出土
土佐藩邸出土

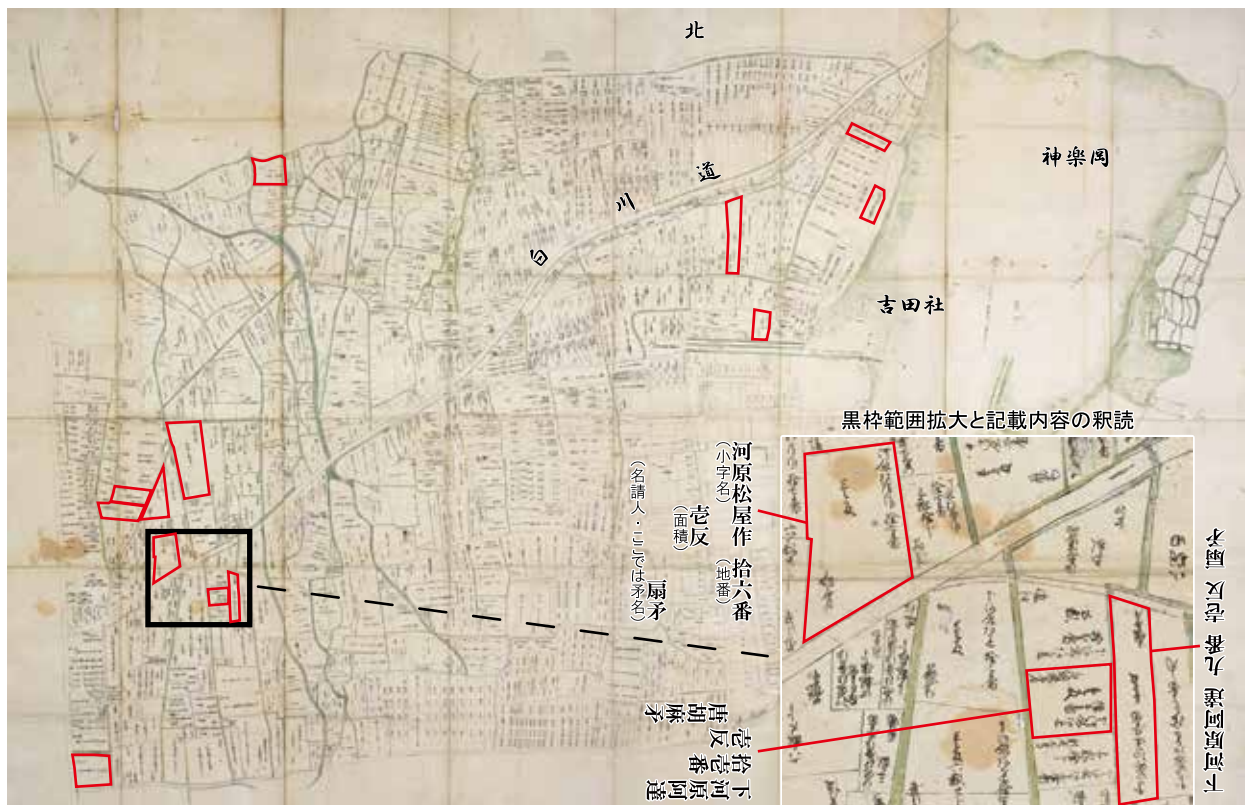


18 御小納戸茶椀(口径11cm・本部構内出土)



19 鉛製銃弾(実寸大・北部構内出土)

製品類が出土しており、藩士達の駐屯生活を偲ばせる品々が認められる。一方、北部構内からは先端のひしゃげた鉛製銃弾が出土している(19)。調練に使われたものだろうか。郊外に広大な敷地が求められた背景には、こうした活動を必要とする時局もあつたに違いない。



20 鉾名の確認される区画（赤枠）と記載例 総合博物館蔵「山城国吉田村古図」に加筆

5. 近世の遺産（2） 一統・吉田村古図の世界一

吉田村古図とは 幕末の急激な変化より前の様子を伝えてくれるのが、「山城国吉田村古図」である。吉田社のふもとに集住する宅地、西方の鴨川べりまでひろがる田畑の区画が、道や水路などとともにつぶさに描かれている。内容から18世紀後葉～19世紀初頭ころと想定されるこの古図は、2021年度に「埋もれた古道を探る」（文化財発掘Ⅷ）として紹介した。そこでは、古道の白川道にかかわる研究に焦点を当てていたが、その後地域の方々を中心に深い関心が寄せられ、文字の釈読が進められていったなかから、興味深い記載が見出されることになった。ここでは、「吉田村古図を読む会」のみなさんによるその成果をお借りしながら、あらためて古図を眺めてみたい。

古図からよみがえる祭礼 田畑の区画に記されているのは、小字名・地番・年貢納入先・面積・名請人（耕作者や所有者）などである。このたび、そこに複数の鉾名称が含まれていることがわかってきた（20）。これらは「鉾田」として、それぞれの鉾の祭礼にかかる諸費用をまかなうためにあてがわれた田畑であったことを示している。



21 村上華岳〈二月の頃〉 明治44年（1911）
原品は京都市立芸術大学芸術資料館蔵

現第四錦林小学校の位置にあった京都市立絵画専門学校（京都市立芸術大学前身）に学んだ村上華岳（1888～1938）は、卒業作品として、神楽岡山上から東方の農村風景を描いた。吉田村古図に描かれたような景観を彷彿とさせる。

鉾のまつりとは 鉾は、疫神を集め退散させる祭具であり、祭礼の先払いとして巡行している。かつては氏子の中に鉾仲間と呼ばれるまとまりが組まれ、それぞれに鉾の意匠を競ったという。有名な祇園祭の山鉾巡行とは、直接の系譜関係にはないものの、趣旨や性格を同じくした京の町衆による祭礼文化といって良い。



22 唐胡麻鉾頭屋飾り（太元講社資料館での復元）
画像提供 吉田剣鉾保存会

6. 未来への遺産として — 吉田木瓜大明神の剣鉾祭礼 —

吉田村の産土神である木瓜大明神（現在は吉田社境内末社の今宮社）にも、毎秋の神幸祭に際し、神輿に先立ち氏子地域を巡行する剣鉾差しの儀礼が今に継承されている。現在は5基の剣鉾が伝わるが、かつては8基とする記述もあり、古図においても現在まで8種の剣鉾名称が見出されている。これらの剣鉾それぞれを数戸からなる鉾仲間が護持し（頭屋制と呼ばれる）、鉾田があてがわれていたとされる。村内に点在する鉾名からは、祭礼を維持する仕組みに意を尽くした先人達の想いがうかがえよう。

頭屋飾りと唐胡麻鉾 頭屋飾りは、剣鉾祭礼を支えていた頭屋制のありようを視覚的に伝えている（22）。かつては、鉾仲間を束ねる役割を割り当てられた各頭屋宅で、祭礼に際しこのような祭壇を設けて神事や会合を行ったという。現在、伝承をもとに唐胡麻鉾のものが太元講社資料館に復元常置され、毎年の神幸祭前夜にこの場で神饌と祝詞を供する神事が執り行われている。唐胡麻鉾は、巡行の先頭を務める一番鉾で、地元では「とぐるま」と呼ぶ。植物の唐胡麻（とうごま）は、トウダイグサ科一年草で、ひまし油を製して緩下剤とする薬草である（23）。剣鉾や幕の意匠は、この葉や花実を写實的にあらわしている。

祭礼のいま 吉田木瓜大明神の剣鉾祭礼は、少なくとも17世紀には記録にとどめられている。昭和10年代には鉾の差し手が少なくなり、居祭りや台車による巡行となっていたが、復活の気運が高まった平成8年（1996）に、既存剣鉾の複製



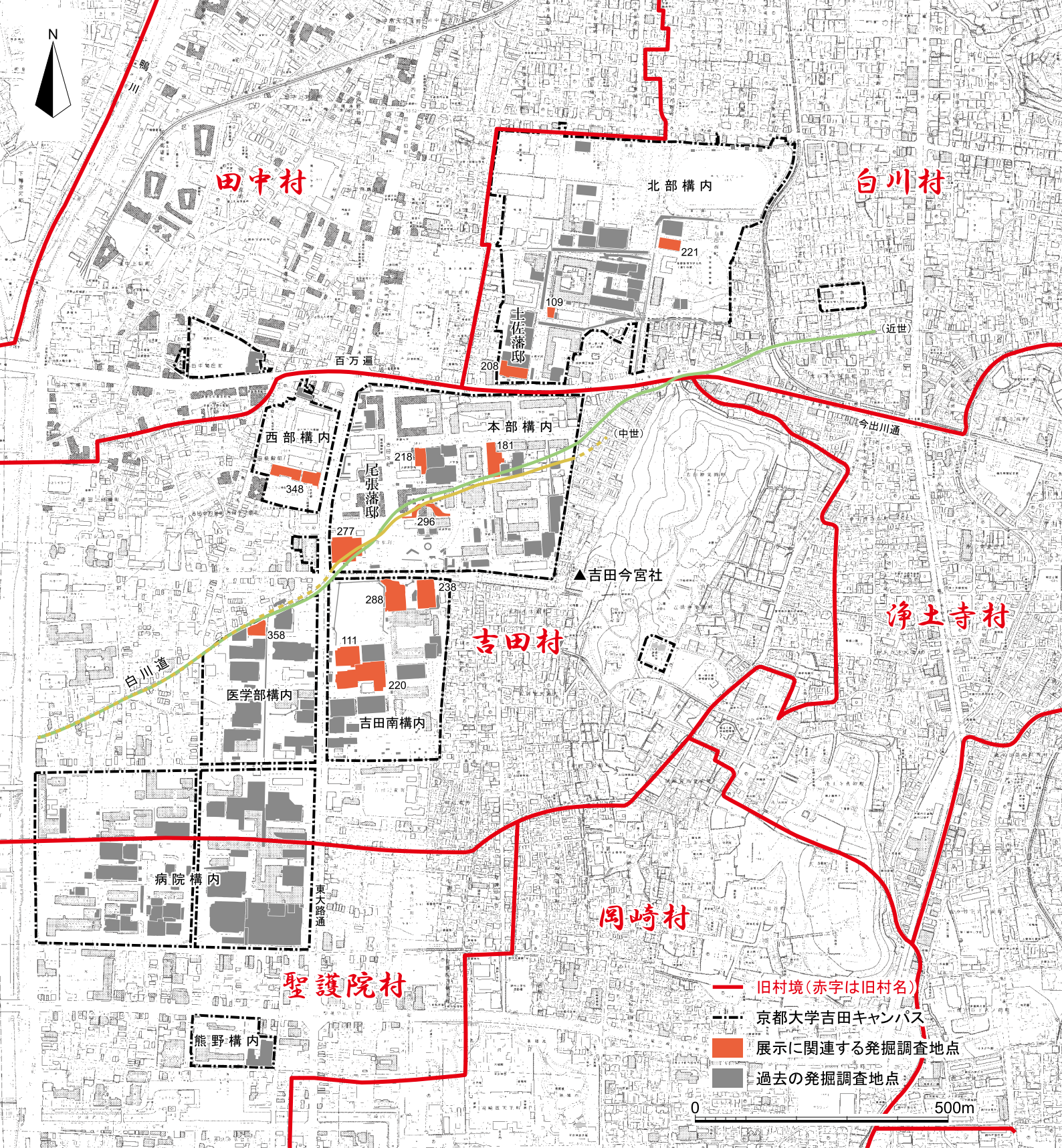
23 本草学者毛利梅園（1798～1851）の描く唐胡麻
〈梅園草木花譜秋之部〉
国立国会図書館デジタルコレクションより

や竿の新調がなされ、鉾差しも再興された。平成20年（2008）以降は、毎年10月第二日曜日の吉田今宮社神幸祭の巡行行列が本部構内を経由するようになり、保存会の人々により時計台前でも剣鉾差しがおこなわれている。令和2年（2020）には京都市登録無形民俗文化財に指定された。

吉田地域をくまなく巡る行列で、剣鉾は要所で鉾差しを披露して住民が出迎えている（24）。竿の長さ5m超、鉾を含めた重さ30kg超を捧げ立て、鈴（りん）を鳴らしながら歩むには、連携と習練が欠かせない。現在、地元小学校における剣鉾クラブの指導をはじめ、地域に伝えられた遺産や技術を継承するためのさまざまな活動が、門戸を広く開きながら続けられている。



24 鉾差しの披露（吉田下大路町付近・2024年10月）



【参考文献】

京都市 1985 『史料 京都の歴史』第8巻左京区（平凡社）

京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会 2014 『京都 剣鉾のまつり調査報告書』1 論説編・2 民俗調査編・3 資料編

京都市文化史民俗局文化芸術都市推進室文化財保護課 2015 『剣鉾のまつり』（京都市文化財ボックス第29集）

【展示協力】

吉田剣鉾保存会／太元講社／吉田村古図を読む会／左京・地域ゆかりの文化実行委員会／京都大学情報環境機構

【執筆】

伊藤 淳史

【編集・発行】

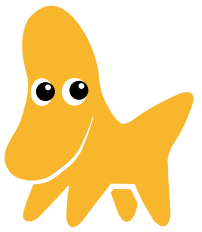
京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター
〒606-8501 京都市左京区吉田本町

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/>

京都大学総合博物館 2024年度特別展
文化財発掘XI リーフレット

吉田遺産探訪－遺跡・古図・剣鉾－

2025年3月19日発行



文化遺産学・人文知連携センター
京大文化遺産調査活用部門
マスコットキャラクター
ぎよまぐん

科研費

展示及び展示解説は、科学研究費補助金（基盤研究（C）22K00985 「『都市化』とは何かー歴史都市京都近郊における長期的検証ー」）の成果の一部である。